

長崎創楽堂

-大学キャンパスにおける舞台芸術の可能性-

新井友梨（長崎大学やってみゅーでスク）

堀内伊吹（長崎大学教育学部芸術表現講座）

1. はじめに

大学のキャンパスに音楽専用ホールができれば、その可能性とは、どのくらいのものでしょうか。即座には、あたたかい声援からそれほど思いやりに満ちていない野次まで、さまざまな回答が飛んでくるだろう。しかし、答えはおそらくとてもシンプルである。文化とは、教育によって身につけるものであり、芸術とは、リベラル・アーツの時代から、重要な研究領域であり続けてきた。

2012年6月に柿落しを終えた長崎大学の音楽堂「長崎創楽堂」の運営について考える際、筆者が事前にまず行き当たったのは、アメリカの大学に附設された舞台芸術センター／*Performing Arts Center*の役割だった。全米にある高等教育機関4,182（分校を含む総数）の内、2,300に存在する舞台芸術センターは、公立・私立の別を問わず、多いところで年間数250以上の公演事業を幅広いジャンルで行い、学生や教職員のみならず、地域の住民や子どもたちを呼び込むとともに、芸術・文化教育の地域拠点として機能している¹。そして、この機能を担保するのは、どのような地方にあっても、ワールドワイドに活躍する一流アーティストがパフォーマンスを行う点にある。全米隅々までの大学において、ブロードウェイをはじめ、クラシックからロック、ジャズ、あるいは演劇やダンスに至るまで、旬のアーティストが最新のタイトルをパフォーマンスにやってくる。地域の人々はそれらを気軽に楽しみ、学生は低価格で鑑賞できる。また芸術系の学科では、アーティストをゲスト・レクチャーに迎えた特別講座が開講される場合もあり、サークルのメンバーは、公演の前後で行われるワークショップで、演技や演奏に磨きをかける。学生は芸術文化活動を身近に体験しその魅力に親しむことで、長きにわたる良き観客となり、またあるいは優秀なパフォーマーとなることもある。一方でアーティストをはじめとするプロの実演団体は、経営基盤の悪化により90年代以降急速に求められている次世代観客層の養成を全米で行いながら、現在約50%近くを占めていると見られる大学公演において、活動基盤を確保し、支持層を広げる。20世紀に入り、安定的なパトロンを失った、芸術文化の担い手として貴重なアーティストという存在をも、このシステムは支えている。

大学キャンパスに舞台芸術の専用ホールを標準装備する、あるいは、「大学＝芸術文化発信拠点」という環境にない日本の大学にとって、これは比較の対象に

¹ 『超大国アメリカの文化力』フレデリック・マルテル P.446,447 (2009)

すらならない事例なのかも知れない。ただ、こうした地域を巻き込んだ芸術発信の動きは、アメリカのみならず、イギリス、オーストラリア等でもそれぞれ独自の手法による実施例があり、また近年アジアでは、真っ先にシンガポール国立大学で類似した方向性による事業構築が進められつつあるようだ²。もちろんそれぞれに異なる社会的な文脈ではあるが、いずれも芸術文化を通じた交流の促進とそこに関わる多くの人々の文化力（文化資本）の向上、という点は共通している。またここで最も重要なのは、今後仮に日本国内で大学がそのような役割を担っていくことは、現在日本国内における文化を巡る諸課題—2008年以降特に厳しさを増している舞台芸術実演団体の経営状況、公共文化ホールの文化発信力（多目的ホール等、ホール自体の機能的限界や事業構築にあたっての専門性・専門的人材確保の必要性、指定管理者制度の現状、他）、舞台芸術供給の地域格差等—に対して有用なヒントをもたらし得る。たとえ地方都市にあっても、多くの市民を巻き込みながら、また多くの声に冷静に耳を傾けながら、身近にひとつの実施モデルを提示することができ、解決の糸口を提案することも考えられる。先例の意味は大きい。

長崎創楽堂は、キャパシティ 100 席の小さな音楽専用ホールである。上記のようなさまざまな事例に学びながら、地方都市の長崎市で、できるところから運営を試みている。全国ツアーが必ず立ち寄るホールに成長することも願望だが、今はまず、マニファクチュアに、この空間の活かし方と魅力あるひとときの提案に、腰を据えて取り組んでいる。アート・マネジメントは、マニュアルではない。生きて進化している芸術の、今最高の価値を観客と結びつけ、また両者の更なる発展と感動を促すのが役目のひとつである。地味な交渉と広報、そしてサービsthroughしながら経験した、この1年目を報告する。

2. 「長崎創楽堂」のはじまり

平成 24 年 4 月、音楽棟の教室改修に伴い、長崎県内でも要望の声が長年高かった、100 人規模で音響の良質な音楽ホールが、大講義室を改修して、長崎大学に開設された。学生たちが新しい音楽を創り出し、成長して行ってほしい、というコンセプトから長崎創楽堂と命名。地元企業からスタインウェイ社製グランド・ピアノ（B-211）の寄贈と事業資金の寄付を受けたこととあわせ、このキャンパス初の音楽専用ホールの出現を、長崎大学では「地域における芸術普及活動の拠点」として位置付け、全学的な協議会の下、運営部会を設置して様々な催しのプロデュースを始動させている。事業としては、学内のみならず市民にも低料金で施設用品を開放するほか、マンスリーを基礎とした年間公演による柱を立てている。

² 『「文化力」の時代—21 世紀のアジアと日本』青木保 P.225 2011 年

表 1 : マンスリー・コンサート企画ジャンル

名称	内容
特別コンサート	十八銀行との共催による、海外のアーティストを含む世界のトップ・プロを招聘する演奏会。
長大クラシック	長崎大学の教員が開催する演奏会
長大フレッシュ・クラシック	音楽専攻学生マネジメントによる、クラシック・コンサート。学生の音楽的モチベーションを結集し、質の高いパフォーマンスを目指す。
サークル・オブ・ライフ!	管弦楽や吹奏楽、合唱など、学生サークルの質の向上と相互交流をコンセプトに、室内楽規模の演奏会を計画。
アーティスト・オブ・長崎	長崎県で活躍する音楽家を、長崎県音楽連盟との連携により市民に広く紹介する。
アジアン・ナイト	教育学部音楽専攻が学術交流協定を結ぶアジアの芸術系大学より、演奏者を招聘。本学教員とのジョイントも含め、国際色豊かなプログラムを提供。
プロフェッショナル・ピアニスト・シリーズ	スタインウェイ・ピアノ寄贈に際して、ピアノ音楽に特化した演奏会シリーズを企画。出演者は、長崎県周辺で公演予定のある中堅アーティストや、国際コンクールのファイナリストを予定。
オフィス・プロデュース	長崎創楽堂運営部会の企画構想により、世界的なアーティストを招聘する長崎で最も高品質な企画。

3. 実施状況

■ ホールの稼働について

講義、企画コンサート、リハーサル以外の時間帯は、基本的に土日祝日を含め、貸館としての機能を担っている。使用料金は大学施設としての規定のもと、専門ホールとしては安価な設定となっている。6月～12月にかけての稼働率は、日数ベースで8月～9月のピーク時76%を頂点として、平均稼働率56%。利用件数の比率は、学内利用41%・学外からの利用40%・共催事業での使用18%となっている。大学キャンパス内、という立地条件と貸会場としての広報を大々的に行っていないこともあり、通常の開館効果（開館時の利用頻度が跳ね上がる等の現象）は起っていない。しかし、長崎市周辺のレスナーの方々の利用が、発表会等に過不足ないキャパシティと地方都市において子どもの頃からスタインウェイ・グランドピアノに触れることのできる貴重な機会の創出、という利点から増加。また地元音楽家の公演拠点、あるいはレコーディング会場としても、次第に稼働頻度を上げてきている。

■ 公演事業について

初年度、柿落とし以外については、学生にやさしく、また地域における開かれた芸術普及プログラムとして、主催・共催による無料公演を17回、全体で18の公演事業を行っている。公演事業の第一義は、まず芸術的な質を最大限に担保することである。まず限られた予算の中で普及プログラムを構築するために、プロ・アーティストの皆様にはアカデミックなご配慮とご協力をいただいている。また近隣で公演予定のあるアーティストについて長崎創楽堂企画とのカップリングを依頼しての公演もある。このような状況の中で、大学というアカデミックな環境ならでは、特徴ある「長崎創楽堂コンサート形式」が次第に生まれている。

ひとつは、出演者のスケジュールとコンディションとの相談により、柿落としから数企画では、オープン・リハーサル及び学生向けワークショップ、公開レッスンを積極的に開催し、教育プログラムとしての機能的位置づけを明確化していることが挙げられる。これについては、学生はアーティストから直接専門的かつプロフェSSIONALな経験に裏付けされた貴重な意見やエピソードを聞き、また、基礎的な部分からの丁寧な指導を受ける等、憧れのアーティストとの対面による興奮も含めて刺激となるところが大きい。

もうひとつは、長崎創楽堂のコンサートは、ほぼ平均して1時間程度のプログラムにまとめられていることである。小さなホールで、また音楽鑑賞はビギナーという方もある中で、約2時間のプログラムをじっと聴いていなくてはならないのは実にハード、という場合もある。音楽ファンには、高齢者も多く、これからもっと増えていくことになるだろう。ショート・タームをコンスタントに聴いていただけることで、いつまでも楽しくお出かけいただけるホールをつくっていくのも、社会のサイズにフィットするという意味で、必要と考えている。

また、地域で子どもたちの音楽教育を支えているレスナーの方々や、あるいは音楽の楽しみ方をもっと豊かにしたい人に向けて、レクチャー・コンサートも積極的に開いている。これも、長崎創楽堂が、あまりに荘厳で大きなコンサートホールではなく、手狭ながら音響の良いホールであればこそその企画である。

そして、国際交流コンサートも、長崎創楽堂の特徴、そして魅力のひとつだろう。長崎大学には学術交流協定を締結する多くの大学が海外に存在している。しかし、それが市民の耳目に広く知られる形で、専門分野と市民の意識のダイナミクスを起こせるかは、いつもあらゆる分野でおそらく課題である。長崎創楽堂のシリーズ、アジア・ナイトは、通常の音楽ホールで取り上げられる機会のそれほど多くない、今アジアで旬のアーティストにスポットを当て、その魅力を紹介。長崎大学にある地域社会の芸術文化コンセルジュとして、アジアから世界へ、顔の見える国際交流への窓口を形成する。

表2：平成24年度 長崎創楽堂公演事業一覧

6月7日(木) 開演 18:30	柿落とし 小曾根真ピアノ LIVE 出演：小曾根真 入場：一般¥2,000(小学生以上)
---------------------	---

7月18日(水) 開演 18:30	音楽専攻学生による企画コンサート「長大フレッシュ」 出演：音楽専攻学生 入場無料
8月25日(土) 開演 14:00	岡崎裕美(歌のおねえさん)によるファミリーコンサート 出演：岡崎裕美、(一部)音楽専攻学生 入場無料
9月12日(水) 開演 18:30	長大クラシック vol.1 宮下茂バリトンリサイタル 出演：宮下茂 ピアノ/三上次郎 入場無料
9月23日(日) 開演 14:30	日高剛ホルン・リサイタル～長大生とともに～ 出演：日高剛 ピアノ/大室晃子 及び長崎大学学生 入場無料
10月31日(水) 開演 11:00	ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団コンサート 出演：ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団 入場無料
11月1日(木) 開演 19:00	アジア・ナイト vol.1 沈松鶴テノールリサイタル 出演：沈松鶴 ピアノ/堀内伊吹 入場無料
12月21日(水) 開演 19:00	長大クラシック vol.2 堀内伊吹ピアノリサイタル 出演：堀内伊吹 入場無料(ドリンクサービス付き)
2月10日(土) 開演 18:30	卒業演奏会 出演：音楽専攻4年学生 入場無料
2月12日(火) 開演 18:30	修了演奏会 出演：音楽専攻修士課程2年学生 入場無料
2月13日(水) 開演 10:30	ピョートル・ジュコフスキ レクチャー・コンサート 出演：ピアノ/ピョートル・ジュコフスキ 入場無料
2月17日(日) 開演 11:00/13:00	TGS ミニコンサート in 長崎創楽堂 出演：東京芸大ストリングス 入場無料
2月20日(水) 開演 19:00	長大クラシック vol.3 加納暁子ヴァイオリンリサイタル 出演：加納暁子 ピアノ/堀内伊吹 入場無料
2月28日(木) 開演 19:00	East Asia Music Fes.～音楽で繋がる東アジア～ ピアニスト・シリーズ 謝承峯ピアノリサイタル 出演：謝承峯 入場無料
3月12日(火) 開演 19:00	アーティスト・オブ・長崎「長崎の音楽家たち—花鳥風月—」 入場料：1,500円
3月15日(金) 開演 18:30	East Asia Music Fes.～音楽で繋がる東アジア～ アジア・ナイト vol.2 キム・ドンスン テノールリサイタル 出演：キム・ドンスン(韓国 昌原大学校芸術大学教授) 入場無料
3月19日(火) 開演 18:30	East Asia Music Fes.～音楽で繋がる東アジア～ アジア・ナイト vol.3 上海師範大学 冯季清教授レクチャー・コンサート 出演：冯季清、李敏、宋罡 他 入場無料
3月27日(水) 開演 19:00	川崎洋介 ヴァイオリンリサイタル 出演：川崎洋介 ピアノ/ヴァディム・セレブリャーニ 入場無料

4. 展望

長崎創楽堂は、まだ始動したばかりであり、予算・企画・運営・広報・集客等あらゆる意味で施行段階であるとともに、課題もある。しかし、いかなる理由があろうとも、地域における文化発信拠点のタスクの下では、事業を後退させることがあってはならない、それゆえに、本小論を書き留めてもいる。

少し古いデータになるが、全国のエンタテインメント公演状況を一挙に統計化していた、ぴあエンタテインメント白書によると、2008年データにおける全国の音楽・ステージ公演数の推計は106,310公演。うち長崎県での開催公演は390公演³、全体の0.36%に過ぎない。全国比率の上位を観てみると、東京が約半数の48%を占め、次いで大阪府が13.8%、愛知県7.7%、福岡県3.9%、残り26.6%がその他のエリアとなっている。上記に示すように、音楽・ステージ公演の驚くほどの地域格差の存在を見て取ることができる。

また、社会全体として、P.ブルデューが指摘するように、「文化的欲求は実は教育の産物」であり、美術館を訪れること、コンサートに通うこと、展覧会を見に行くこと、読書すること、といった「あらゆる文化慣習行動」＝趣味、「および文学・絵画・音楽などの選好は、まず教育水準（学歴資格あるいは通学年数によって測定される）に、そして二次的には出身階層に密接に結びついている⁴」というバランス構造は、文化的な活動への参加の最も大きな社会的要因として教育水準が指摘される21世紀に至っても、ほぼ変わっていない。

つまり、若手人材育成を担う大学の役割として、また地域のアカデミック・センターとしての地方国立大学として、長崎創楽堂には、重要な役割が存在しているといえるだろう。

これからも、また学生とともに、ホールの入り口で来場者をにこやかに、さわやかに迎えていきたい。経済立国から文化立国へ、コンクリートから人へ、価値観の転換が声高に語られるが、本来芸術や教養の社会的な役割であり価値が、根本的に変わったことはない。本質を見極めつつ、襟を正して、創楽堂の夢をかなえていきたい。

³ 『ぴあエンタテインメント白書 2009』ぴあ総研 P.178-188 (2009)

⁴ 『ディスタンクシオン I』ピエール・ブルデュー P.4 (1990)

引用文献

『ディスタンクシオン I —社会的判断力批判』

ピエール・ブルデュー 石井洋二郎 訳 藤原書店 1990年

『超大国アメリカの文化力—仏文化外交官による全米踏査レポート』

フレデリック・マルテル 根本長兵衛、林はる芽 訳 岩波書店 2009年

『ぴあエンタテインメント白書 2009』 ぴあ総研 2009年

『「文化力」の時代 21世紀のアジアと日本』 青木保 岩波書店 2011年

参考資料 (Web)

テキサス大学オースティン校 パフォーミング・アーツ・センター

<http://texasperformingarts.org>

クラナート舞台芸術センターホームページ <http://KrannertCenter.com>

リスト視覚芸術センターホームページ <http://listart.mit.edu>

オーストラリア国立大学ホームページ <http://anu.edu.au/>

オックスフォード大学ホームページ <http://www.ox.ac.uk>